

【書評】

大雪山国立公園 70 周年記念出版から小泉秀雄・太田龍太郎の生涯を探る

武田 泉

北海道教育大学岩見沢校地理学教室

【Book Review】

On the Publication Commemorating the 70th Anniversary of Taisetsuzan
National Park, Hideo Koizumi and Ryutaro Ota

Izumi TAKEDA

Institute of Geography, Iwamisawa Campus, Hokkaido University of Education, Iwamisawa, 068-8642, Japan

要 旨

大雪山国立公園指定 70 周年を迎えた 2004 年、大雪山の歴史に深く関係する 2 人を紹介する 2 冊が出版された。それぞれ、小泉秀雄と太田龍太郎についての著書である。国立公園の指定に向けて生涯を捧げた気骨ある人物の生涯について、新たな側面が浮き彫りにされた。しかし、小泉秀雄（及びその周辺）と太田龍太郎との関係や、「層雲峡」命名と「霊山碧水」の名称との兼ね合い等、未だ解明されていない点も残されている。

Keywords: 大雪山国立公園, 小泉秀雄, 太田龍太郎, 層雲峡, 谷口梨花

1. はじめに

昨 2004 年末は、1934 年に指定された大雪山国立公園の 70 周年という節目の年である。今回の節目の年は、記念行事というよりは、むしろ異なる 2 人の著者により次の 2 冊が上梓されたことに大きな意義があるであろう。それは、「大雪山の父・小泉秀雄－山と植物ひと筋に生き抜いた生涯」（清水敏一著）と「大雪山国立公園の生みの親・太田龍太郎の生涯－復刻『霊山碧水』」（笹川芳江編）である。今回も昨年の書評に引き続き、大雪山国立公園の指定に向けて生涯を捧げた気骨ある人物の生涯についての価値ある出版について、書評という形で紹介していきたい。

まず両著者の紹介をしたい。前者の著者は昨年本誌で紹介した清水敏一氏で、在野の山岳書誌研究家である。山岳書誌研究として大雪山に関わる書誌や、小泉秀雄、村田丹下について著書を精力的に出版され、旭川市立博物館での特別展「小泉秀雄展」も開催されている。今回は改めて小泉秀雄についての集大成として、これまで余り触れられてこなかった小泉の生涯と家族の趨勢、大雪山調査の背景となった信州（南・北アルプス）・千島等の他地域での植物採集活動、小泉作成の膨大な植物標本のその後、等について、精力的な調査活動によって書き上げられたものである。一方で、大雪山調査会等の関連する当時の旭川における諸群像については昨年紹介の前著で取り上げられているため、今回は詳しく触れられていない。

一方、後者の著者である笹川芳江氏は、太田龍太郎の実の孫に当たる方である。笹川氏は関東地方で出生し、幼少の時から祖父の偉大さについて家族から幾度となく知らされてきて、太田の著書『霊山碧水』の理念を何とか現代にも語り継ぐと、今回の著書の復刻出版にこぎつけたという。現在は道内の旭川近郊の東神楽にも居を構えられ、アクティブに大雪山の自然保護に取り組む「石狩と大雪の自然を守る会」の会員にもなられ、登山も楽しんでいる、とのことである。ではこの2冊について、具体的に紹介していきたい。

2. 「大雪山の父・小泉秀雄—山と植物ひと筋に生き抜いた生涯」の内容

まず序章の「大雪山の主・小泉秀雄」では、大雪山系の一峰頭だが全山砂礫地で鈍円平坦な小泉岳の命名について、大雪山調査会調査委員として調査活動を一手に引き受けた小泉自身が遠慮しながらも光栄をありがたく受けようと許諾したのではないかと、著者はまず推定する。次に小泉探索の経緯としては、著者の前著や没後50周年の「植物図集」の出版、旭川市立博物館での特別展開催の後、曲がりなりにも各種メディアで取り上げられてきたが、2002年に思いがけず神戸在住の小泉という人物から照会があった。この小泉雅彦氏は秀雄直系の孫に当たり、自身が登山愛好家でもある。こうしたことから、本書のあとがきにも掲載されている体験談がある。すなわち2003年8月3日に悪天候下を一家が清水氏らと共に、小泉家一族としてはじめて銀泉台から小泉岳に登頂したわけである。その孫の立場から小泉秀雄の別の角度からの情報を入手することが出来、大雪山以外の本州や千島方面での最終探索活動についても新たに書き起こすに至った、と清水氏は説明する。

次に第一章の「小泉秀雄の生涯」は、時系列的な記述となっている。秀雄の生い立ちでは米沢藩士の次男として誕生し、兄が京都大学で植物学の教授となり学者として大成した源一である。その一方で、弟の秀雄は高等農林学校を家事都合のため退学し、独学で文部省教員検定試験に合格し、独学での学問探求の道に進む。旭川には1911年に渡道し、庁立旭川中学校教諭に赴任、翌月には

早くも生徒を引率して大雪山に登っている。また文部省講習会の講師役を引き受け、開道50周年北海道博覧会へ大雪火山模型を出品した。当時秀雄の家庭では初妻の重体のさなかの模型完成であり、研究奨励金の下賜を受けたものの初心を失ってしまうことになった。1920年に上川中学を休職、一旦は高知県立第三中学へ赴任するも、居を落ち着いたのは長野県松本であった。信州松本時代には、まず長野県立女子師範学校博物科教諭として赴任し、史蹟天然記念物調査委員も嘱託される。松本時代にも大雪山等の長期調査にも出かけたが、むしろ県内近郊の日本アルプスの調査活動が主体となった。なお松本時代の事件として、大雪山の山名を巡る河野常吉との1年以上に渡る論争についても触れられている。東京時代については、まず1933年共立女子薬科専門学校講師となって田園調布の中古の家に居住し、その後新居を求めて小金井へ引っ越す。この時の様子については次女亜矢の話を基に家の間取りや父親としての秀雄の様子を描写している。共立女子



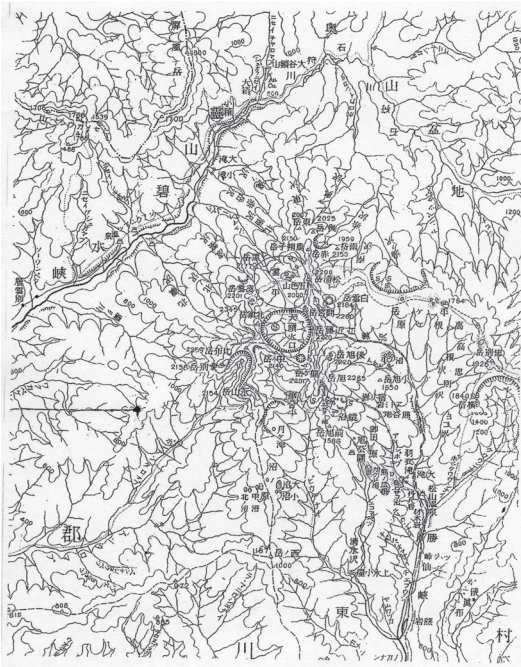


図 「北海中央高地地方地形詳図」(部分)

清水氏注:『北海道中央高地の地学的研究』に添付挿入されている地図で、北海道庁二十万分ノ一地形図を基礎として小泉が訂正増補した(初出『理学界』15-12 掲載)。

武田注:現在の天人峡が「松山温泉」「勝仙峡」と記されている。当時は旭岳への登山道が松山温泉を起点にしていたことがわかる。本学研究施設のある現在の旭岳温泉は戦後開かれたもので、この時代には「ユコマンベツ」と記された沢があるのみであった。

も紹介されている。また、塩谷忠(北海タイムス記者で大雪山調査会理事)が、戦後になって帯広営林局部内誌『寒帯林』に投稿した大町桂月の登山招致時の顛末等の大雪山・層雲峡草創期の諸事情や、十勝岳連峰を含めた大雪山群山名の変遷、前述の小泉の著書が山岳界に与えた功績としての大島亮吉や伊藤秀五郎等の著名な登山家への影響、他についても触れられている。

第三章から第六章では、大雪山以外の小泉の植物採集調査記として、南アルプス・北アルプス・千島エトロフ・北千島の各調査行について記述されている。信州の日本アルプス関連については、秀雄と師弟関係にあった横内斎著『山野巡歴』他の記載から記述されている。とりわけ、南アルプス仙水峠付近等で典型的に見られる「転倒型遺存寒地植物帯」という、現代の植物生態学にも通じる課題について詳しく紹介され、また高山植物の保護や庶民の「理想的楽園」としての日本アルプスについても、小泉は提唱している。後段の千島エトロフ・北千島についても、帯広営林局機関紙『樹水』他を基に記述されている。戦前の北辺の領土において、情報のきわめて少ない中、単独あるいはたまたま同行した大学山岳部登山パーティーとの調査・行動記がビビッドに描かれている。

薬科専門学校時代の小泉についても、卒業生の思い出話から黑板に書かれた植物イラストの精巧さや、近郊への採集実習での指導の様子、薬草園の整備等、秀雄の教育者としての人柄が窺い知れる。そして戦時色が色濃くなった1944年には、既に癌が進行しており、秀雄は現職のまま翌1945年1月18日、59歳で永眠している。最後の授業の際黑板に書かれたかぼちゃの茎の顕微鏡図も大変精巧で、誰かが「消すなかれ恩師の筆のあと」と黑板に書いていたのを思い出す、とのことである。なお、この章での異色な記述として、秀雄の没後に長男・清雄氏(小泉雅彦氏の父親)が小金井の敷地の遺産相続をめぐる係争に遭遇し、家族と別れ不遇な単身生活を過ごしたことに触れられている。

第二章の大雪山調査行では、「大雪山登山記」の節として旭川中学での生徒引率登山の様子、とりわけ現代とは異なる松山温泉(現天人峡)からの旭岳登山ルート(図参照)での廻行の様子や採集活動について、その時代の登山事情と共に生き生きと描かれている。また秀雄が松本に移住後に、雑誌『山岳』に連載された『北海道中央高地の地学的研究』や大著『大雪山登山法及登山案内』が全国的に日本の登山界に与えた多大な影響について記されている。なお、1924年8月に秀雄は植物調査中に落石に遭遇し瀕死の重症に遭ったことや、夏季大学が開催され講師として参加した際の様子

終章では「植物標本とその評価」として、秀雄の没後にいかにして膨大な植物標本が国立科学博物館に寄贈されたかという経緯が紹介されている。また同標本は、その膨大さから未だ整理が済んでいないという。また、その中でも地衣類の標本が特徴的で、今日の研究課題にも繋がる小泉標本の重要性について記述されている。次に家族とのふれあいについて家族の印象から植物採集に没頭する夫秀雄と、その蔭で標本作りの下働きに忙しい当時の家族の姿が描き出されている。余禄として、日常生活の一端として酒を嗜む姿、前述の小泉展（旭川市立博物館）でも展示された実用新案の高枝切器他に見られる秀雄のアイディアマンぶり、植物学学術用語として「高山植物」ではなく「寒地植物」を提唱した秀雄の潔癖さ、等についても触れられている。

3. 「大雪山国立公園の生みの親・太田龍太郎の生涯―復刻『靈山碧水』」の内容

後者の「大雪山国立公園の生みの親・太田龍太郎の生涯―復刻『靈山碧水』」は、次のような構成となっている。まず、単行本『靈山碧水』の復刻が掲載されている。『靈山碧水』の後半は、「石狩川上流域保護国立公園経営の件」という1910年に「北海タイムス」紙に連載された、逓信大臣後藤新平に宛てた文書となっている。また単行本『靈山碧水』にも掲載されている龍太郎による「北見地方踏査日記」（旭川～北見間（現石北本線）鉄道敷設促進のための愛別から遠軽・北見方面への探検記）や「北海道の奥の院探検」（旭川～帯広間（旧士幌線）鉄道敷設促進のための愛別から十勝音更方面への探検記）、「秘密境」（北海タイムス掲載）、「大雪山登り」（小樽新聞、1933年掲載）も掲載されている。同単行本は、全体的に当時の様子を示す貴重な写真が比較的多く掲載されている。龍太郎の文章は漢文美文調であるが、時にはユーモアとリズムのある文章となっている。また鉄道敷設のための2度の踏査探検行では、鉄道技師一行の他に決まって先導役にアイヌの人材が起用されている。そして道無き谷間を遡行していくため、難行苦行の様が随所に描かれている。なお、

龍太郎は文中で親しみを込め「アイヌ君」と彼らと呼んでいることは、現代の視点からも示唆的である（武田、1995）。また「北見地方踏査日記」での帰着後、留守中龍太郎が行方不明の最中、三女・四女が札幌の病院で危篤の電報を受けていた、等のエピソードも書かれている。「大雪山登り」では、戦前の大雪山表登山口が愛山溪で、当時の登山の様子を垣間見ることが出来る。

その後付録として、鉄道省所属の紀行作家・谷口梨花著の「靈山峡（層雲峡）」（同著『旅行体賛』所収）、龍太郎による「熊本城外父の仇討ち」（北海タイムス、1912年掲載）、「隠れたる偉人太田龍太郎氏」（小樽新聞、1913年掲載）、「六百年前満州遠征の偉人」（龍太郎著）、「中央線（現石北本線）開通」（旭川～愛別間）の際龍太郎による祝詞、他が掲載されている。龍太郎は大雪山に関わる愛別村（分村により現上川町）村長から既に転任し、胆振の壮瞥村長となっていたが、その際に谷口が龍太郎を訪ねたことで、石狩川上流のすばらしさに関する情報を入手し、その際の旅行記、ということになる。また「仇討ち」の経緯についても、幕藩体



制終末期における武家藩士の日常の一端を示す内容となっている。

次に、笹川芳江氏（龍太郎実孫）によって「年譜に見る太田龍太郎の生涯」で龍太郎の各年における出来事が、笹川氏所蔵の写真・新聞記事・辞令・表彰状等の各種資料写真と紹介文によって、時系列的に記述されている。1863年に熊本藩士の長男として生まれ、4歳の時父親が暗殺され、翌年義兄の助太刀で父の仇討ちを果たしている。13歳の時安場和保（後の男爵）に引き取られ、後藤新平と竹馬の友となり、1886年24歳の時以降は内務官吏として地方県庁勤務を拝命している。1898年安場和保男爵の北海道庁長官就任を契機に、龍太郎も渡道し道庁に勤務したが、その後武士道の鼓舞と軍人家族の救護を主眼とする北海道尚武会や日本赤十字社、釧路で北海タイムス社支社長等も勤めている。1910年には愛別村長となり、鉄道敷設実現に邁進する。1911年の記述では、鉄道敷設のための2度の踏査探検行の結果通信大臣・後藤新平に提出した「石狩川上流域保護国立公園経営の件」が、俵浩三氏著の「北海道の自然保護」の中で、わが国における「景勝地保護」や「国有地に私権を入れない」という動きの萌芽、及び先覚者の知られざる自然保護への努力として、積極的に評価されている点についても引用されている。他に石北線全通時の「感謝状」の写真他も掲載されている。

その後、龍太郎は1916年に愛別村長を辞任し道会議員に当選、前述のとおり1922年には胆振の壮瞥村長となった。翌1923年に紀行作家・谷口梨花が来訪する。谷口は、戦前期において比較的著名な紀行作家であり、全国の鉄道路線に沿って書かれた旅行案内記を出版している。谷口と龍太郎は、お互いに同郷の熊本出身と知り意気投合し、龍太郎の言に従い層雲峡探索に出かけ、その模様を単行本「旅行体賛」に「霊山峡（層雲峡）」の項として掲載している。この際谷口は、1921年に大町桂月によって「層雲峡」と名を変えているものの、「この景勝の名は太田氏の霊山峡を維持するのが妥当であると思う。」と同書で指摘している。この年上川まで開通した石北線鉄道は、1932年に遠軽まで全通し、沿線市町長から感謝状を受けている。1934年に『霊山碧水』が発刊され、同年12月に大雪山が国立公園に指定された。これは龍太郎が1910年に後藤新平に宛てた文書作成から、実に24年後のことであった。そしてその翌年、龍太郎は東京にて永眠するが、同郷で同じ年に生まれた徳富蘇峰から龍太郎の長男宛に弔意文が寄せられ、その写真も本書に掲載されている。

4. 大雪山国立公園の70周年における両出版の意義と今後の課題

日本の国立公園は、今日においては生態系保護等の自然の価値の議論が主流となっている。しかしながら歴史的には、特に戦前期においては外客誘致の側面が強いなど、地元での指定運動の側面が大きく、各公園で指定への立役者が存在する。しかしながらこうした人物については次第に忘れ去られる傾向にあり、「××周年」といった節目の年に若干回顧される程度のことが通例であった。そうした中、今回の「大雪山国立公園70周年」にあたって、小泉秀雄と太田龍太郎という異なる2人について、在野研究者と子孫という異なる立場の2冊が時を同じくして上梓されたことは、誠に意義深いことである。

この小泉と太田の活躍時期には多少のずれがあるものの、両者は同時代を存命していたわけだが、両者の関わりは意外にも少ないと言わざるを得ない。小泉の側から太田は、「大雪山登山法及登山案内」の中で、大雪山の黎明期の探検者の一人として触れられているだけで、後年の大雪山調査会設立や大町桂月招致の際の群像には、太田は全く顔を出していない。この一因に太田が既に愛別村長を辞任し、大雪山の地元を去っていたことが背景として考えられる。一方で、太田と親交を深める谷口が、桂月による「層雲峡」よりも太田命名の「霊山峡」を推している点や、太田が大雪山を「北海アルプス」と命名していたこと、等も大雪山の歴史を考える上で興味深い。また山岳書誌研究や

山岳研究の見地からは、大雪山の価値は頂上部の高山帯にあり、山麓部の溪谷や森林帯についてはあまり関心が持たれなかったのではとする見解も耳にする。もしそうであるなら、溪谷を紹介した太田よりも高山帯を紹介した小泉の方に、後世になってより関心が集まったのかもしれない。

また、小泉が調査員として加わる大雪山調査会の理事であった塩谷忠が、戦後に執筆した大雪山・層雲峡草創期の諸事情（帯広営林局部内誌『寒帯林』所収）の中の記述から、清水氏は「層雲峡」の名称について次のような指摘をしている。1910年、石狩川上流を太田が探検して「霊山碧水」と名付け、小泉が「峡」を加えて「霊山碧水峡」とした。しかし、塩谷は別の命名を大町に依頼し、結局大町命名の「層雲峡」の名称が定着してしまっている。ただ塩谷と太田がいかなる関係にあったのかについては、未だ解明が不十分であるが、今後の資料探索によって新事実が出ることを強く期待したい。さらに付け加えるならば、後者の笹川氏の著書が、子孫の立場から実祖父の偉業を称えた復刻出版として達成したが、新たに見出された新資料からの客観的な考察によって、より多面的な太田の実像に迫ることが出来たのではないだろうか。この点について、新たな資料の活用方をお願いしたいものである。

5. おわりに

大雪山国立公園の70周年にあたる2004年、太田龍太郎について孫の立場から紹介された笹川氏は、単行本出版のみならず所蔵資料の展示会を層雲峡ビジターセンターで短期間ながら開催された。またその様子は、NHKテレビのローカルニュースでも紹介された。今後、大雪山のみならず自然保護行政の大きな変貌が予想される中、自然保護の先駆者の業績は「温故知新」の精神で後世に伝えられるべく、地元のビジターセンター等には是非とも常設展示として取り上げていただきたいものである。

また小泉の研究をライフワークとして取り組んできた清水氏は、次なる探索は大雪山とはまた別の人物の探索になると聞く。今後の精力的な探索を期待したい。

清水敏一著、大雪山の父・小泉秀雄一山と植物ひと筋に生き抜いた生涯。北海道出版企画センター発行、2004年、438頁、4500円。

笹川芳江編、大雪山国立公園の生みの親・太田龍太郎の生涯－復刻『霊山碧水』太田龍太郎著。北海道出版企画センター発行、2004年、287頁、2200円。

文 献

武田泉 (1995) 大雪山国立公園の自然保護を支えた4人の軌跡－太田龍太郎・小泉秀雄・大町桂月・林豊洲－。旭川研究, 7: 39-62.

武田泉 (2002) 十勝三股の価値は自然にだけで産業遺産としてはいいのか－環境省「ふれあい自然塾」構想を端緒とする地元論議とその方向性－。北海道の文化, 74: 37-45.

武田泉 (2004) 書評「知られざる大雪山の画家・村田丹下－北海道から東京、故郷岩手へ、その足跡を溯る」。北海道教育大学大雪山自然教育研究施設研究報告, 38: 61-67.

古川隆久 (1994) 紀元二千六百年奉祝記念事業をめぐる政治過程。史学雑誌 103-9: 1-36.

井野忠治 (1984) 「阿蘇国立公園誕生記」。阿蘇町観光協会, 27頁。